

扉を開けて 外に出よう ― 奉仕は人生を豊かにする

国際ロータリー第 2750 地区

東京中央ロータリークラブ

太田嘉正



本文の見出し

1. 扉を開けるということ
2. 超私の奉仕賞 受賞と名誉会員
3. なぜロータリーに入会したのか
4. 1983 年から続く無料歯科医療奉仕・フィリピンでのデンタルミッション
5. ロータリーは世界と繋がるネットワーク
6. 無料歯科医療奉仕活動の終章と新世代へ繋ぐ
7. 空飛ぶ車いすプロジェクトの再生
8. フィリピンのレガスピ・アルバイ地方にある『マヨン火山』
9. 車いすテニス・ジュニア選手権
10. 東京オリンピック・パラリンピック競技大会
11. ミャンマー・パダウツミヤイン僧院 教育小学校災害復旧工事
12. インド・デリーでの POLIO 根絶ワクチン投与活動に参加
13. 7 つの重点分野の基本的教育と識字率向上
World Stationery Gift Project
14. 2011 年4月 東日本大震災・石巻泥さらいボランティア 企画・参加
15. 終わりに 奉仕活動ってなんだろう

1. 扉を開けるということ

皆様にとって、ロータリーの楽しみとは何でしょうか。

また、どのようにロータリーをお楽しみになっているのでしょうか。

私は、他クラブへのメイクアップに積極的に出向き、そこで出会う会員の方々との交流を大切にしています。もちろん、自クラブの例会や同好会、ファイヤーサイドミーティングにも多くの学びと喜びがあります。しかし、それでもなお——私は「扉を開けて外に出ること」に大きな価値を感じています。

それは単なる「外出のすすめ」ではありません

心の扉を開き、人と出会い、社会と関わること

それこそが、人生を豊かにする第一歩だと信じています

私の人生は、ロータリーとの出会いによって大きく広がりました

時を、そして歳を重ねることは、何かを失うことではありません

むしろ、新たな人生の扉が開かれる時です

だからこそ、家にこもるのではなく、思い切って外へ出てみましょう

散歩を日課にし、風の香りや空の色、季節の移ろいを感じてみてください

身につける服は、少しだけ大胆に

色やデザインを楽しみ、靴は丁寧に磨きましょう

背筋を伸ばし、踵から一步を踏み出す——それだけで景色は変わります

視線を上げて、前方の建物の窓を見ながら歩いてみてください

見える景色の中から、自分が「美しい」と感じるものだけを選び心に留めてください

これまで積み重ねてきた知識や経験を、誇ってもよいのです

かつての自分を、もう一度輝かせてもよいのです

人に教えること、考え続けることをやめないでください

テレビに費やす時間を少し減らし、一人で楽しむ時間よりも、誰かと笑い合う時間を選びましょう

人と語り合い、特に若い人たちと笑顔を交わすことはとても大切です

時には、少しわがままになっても構いません

異性に興味を持つことや、もう一度恋をしてみることも素晴らしい経験です

かつてできなかったことに、今だからこそ挑戦してみましょう

新しい技術に触れ、スマートフォンを使って世界とつながる

それもまた、素晴らしい冒険です

お金に縛られるのではなく、心が動くことにお金や時間を使いましょう

そして何より——

毎日「ありがとう」と伝えることを忘れずに
一日に一度は声を出して笑いましょう

人を褒めること

若い人の話に耳を傾けること

花を飾ること

小さな文章を書くこと

新しい場所へ出かけること

それらすべてが、人生を豊かにします

人生は、いくつになっても「今」が一番若いのです
今日も、明日も、新しい自分に出会いましょう

扉の向こうには、まだ見ぬ景色が広がっています
空は高く、雲は白く、そして果てしなく広い——
さあ、扉を開けましょう

2. 超我の奉仕賞 受章

2017-18 年度、RI 会長 イアン・ライズリー氏から、

「超我の奉仕賞 (Service Above Self Award)」という栄誉ある賞を拝受いたしました。

この賞は、世界 120 万人のロータリアンの中から、年間わずか約 100 名のみに贈られるものです。

しかしながら、私はこれまで「賞をいただくため」に活動してきたわけではありません。

ただひとつ——子どもたちの笑顔を見たい、その一心で歩んできただけです。

この賞は、長年にわたり継続的な奉仕活動を実践してきたロータリアンに贈られるものです。

私の受賞に当たっては、IPDG 大槻哲也氏、そして DG 猿渡昌盛氏のご理解とご推薦を賜り、2017 年 10 月、猿渡ガバナーの当クラブ公式訪問の折に推薦とご署名を頂き、国際ロータリーへ申請いたしました。

その後、年度最終の会長・幹事会において、この栄誉を授かることができました。

当時は、『Service Above Self Award』という名称自体が広く認識されておらず、関係者の間でも、『これはどのような賞なのか』といった戸惑いの声があったことも事実です。

私自身も、数年ぶりの受賞者であったことから、多くのロータリアンにとって馴染みの薄い賞であったのではないかと感じております。現在、国際ロータリー第 2750 地区には約 4,650 名の会員がおりますが、この賞を拝受しているのは現時点で私一人と伺っております。このことは誠に光栄なことであり、私にとっての大きな誇りの一つです。

このような栄誉を、今後さらに多くのロータリアンが受けられることを心より願っております。



超私の奉仕賞 盾



ピンバッジ

3. なぜロータリーに入会したのか？

私は、一級建築士として建物を設計し、工事の監理をしてきました。当時は、ROTARY には職業分類が同じ方の入会拒否する時代でした。佐原高校の学年同窓会を主宰・開催することになり、その縁で気の合った友人たちとの新たな交流会「新橋会」を立ち上げました。そこに参加していた歯科医師から、「来週の木曜日からフィリピンに行かないか？」との誘いを受け、早速出かけることになりました。

2000 年の夏の暑い日、マニラに一泊後、更に遠い「バギオ市」まで行く事になっていたようです。参加者は20数名でしたが、旧知の方はわずか3人だけでした。約 10 時間のバス旅後、到着したのは名前も知らない小学校でした。

何もわからないまま佇んでいると、水戸から参加していた歯科医師が「取り敢えず15分間は見ていてください」とアドバイスをくれました。この無料の歯科医療奉仕活動は「子供たちの歯の治療とブラッシング指導」が目的でした。

そして初参加の私は、子供たちを順番に整列させ椅子に座らせる、うがい用のカップに水を灌ぐ、また交換すること、治療後に痛み止めや抗生剤を配布し飲み方を教える、などの作業を担当しました。

初日の活動が終わり、夕食を摂っているときに初めて、「これは ROTARY の活動なんだよ」と教えられました。翌日も、素晴らしい活動は「感動」の一言でした。この様な活動をしている「ROTARY」に入り、人の役に立ちたいと思いましたが、どうすれば入会できるのかはわかりませんでした。

それでも、毎年数回この活動に参加しておりました。

暫くして、偶然にも同業の設計事務所を主宰している友人が、『ロータリークラブに入らないか？』と声を掛けてくれました。もしよければ、帝国ホテルに「木曜日の 12 時までにお出でよ」と誘われ、初めてロータリークラブの例会に参加させていただきました。多くのの方々に紹介され、名刺交換をさせて頂き、帰宅時には入会申込書を手にし、楽しい気分で帰宅しました。

私の入会は2001年4月12日です。入会年齢が遅かったので、その遅れを取り戻すべく積極的にメイクアップを重ね、現在も高い出席率を維持しながら活動を続けています。



東京中央 RC、設立時のバナー、 創立 30 周年時のバナー、 創立 40 周年時のバナー



初めての点鐘・会長挨拶 2020年

例会場 帝国ホテル 光の間

名誉会員証の授与

毎年、フィリピンにおいては、「Induction & Turnover Ceremony」という周年行事が盛大に開催されます。その式典の席上において、私は「名誉会員の盾」を拝受しております。

この名誉会員の称号は、2010 年には Rotary Club of Metro Iloilo より、

また 2013 年には Rotary Club of Downtown Manila より授与されております。

名誉会員とは、長年にわたりフィリピンの地において、現地ロータリークラブと志を共にし、継続的に奉仕活動を実践してきた者に対し、その功績と貢献を称えて贈られるものです。

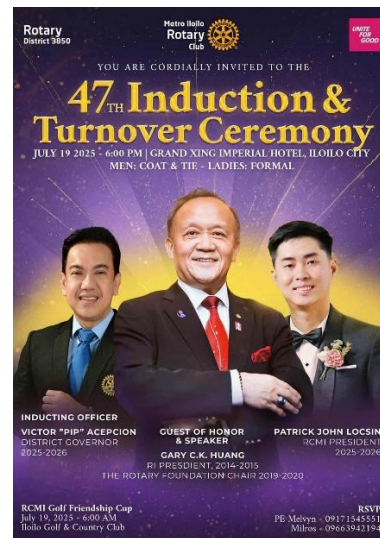
この栄誉は単なる表彰にとどまらず、各クラブの歴史の中に正式な記録として刻まれ、永く受け継がれていくものでもあります。



RC of Metro Iloilo の名誉会員証



RC of Downtown Manila の名誉会員証



RCMI の第47・48回の招待状

RCDM の第47回の招待状



RCMI と RCDM の会員と

元 RI 会長のゲーリー・ホアン氏と



RCMI とのバナー交換

RCDM の DG 及び Manila 市長と

4. 1983 年から続く無料歯科医療奉仕活動・フィリピンでのデンタルミッション

目的は、現在もなお存在する貧富の格差の中で、とりわけ経済的に厳しい状況にある方々が、歯科医療を受けることすら困難な現実に取り添うことにあります。

私たちにとって、生活の基本となる「食事」は、口から喫食し身体をつくる大切な営みです。しかしながら、その当たり前の行為でさえ十分に行うことができず、食べる喜びを感じられないまま日々を過ごしている方々も多くいらっしゃいます。私たちの活動は、そうした方々の少しでも力になりたいという思いから始まりました。

この活動は、RI 第 3810 地区(旧 381 地区)に所属する RC of Downtown Manila の呼びかけに応じ、RI 第 2820 地区の内科医・中先生、歯科医・大森庸先生の 2 名のロータリアンがマニラを訪れ、医療支援を開始したことに端を発しますがそのお二人は既にご逝去されております。しかしその志は受け継がれ、こんにちまで活動が継続されています。

本活動は、ロータリーを通じた世界社会奉仕(WCS:現在は使用されていない呼称)の一環として行われてきました。

では、なぜロータリーなのか——その問いに対して、私たちは次のように考えています。

それは、フィリピン共和国のロータリアンやそのご家族・関係者との信頼関係を築きながら、現地の人々に直接貢献できるからです。活動を安全かつ円滑に進めるうえで最も重要なことは「安心と安全」の確保であり、それを実現してくれる存在が、現地のロータリアンなのです。

この無料歯科医療奉仕活動では、必要な医薬品や治療器具の一部を日本から持参し、現地ではロータリアンの協力のもと、患者の募集、活動場所の確保、不足物資の手配、水やボランティアの確保など、多方面にわたる支援を受けています。そして何より、私たちが安心して活動できる環境が整えられることで、初めてこの奉仕活動が成り立っています。

活動場所については、本来であれば同一地域で継続的に実施することが望ましいのですが、支援を必要とする方々は広範囲に点在しており、さらに現地ロータリークラブからの要請にも応える必要があります。そのため、活動は毎回異なる地域で実施されることになります。

また、このように各地を訪れることは、新たな出会いと交流を生み、小さな積み重ねではありますが、確実に友好の輪を広げていくことにもつながっています。

私たちはこの活動を通じて、フィリピンとの友好関係をさらに深めるとともに、ロータリーの究極の理念である「世界平和」の実現に、微力ながら貢献していきたいと考えています。

この中での私の役割について

一言で申しあげるならば、「会場設営の設計者」です。

このミッションには、歯科医師や歯科衛生士といった専門職に加え、私のような医療分野に直接関わらないボランティアも参加しています。こうした多様なメンバーが一体となり、円滑に活動を進めるための“流れ”を構築することが、私の使命です。

これまで建築の分野において、工事の工程監理や安全確保に携わってきた経験は、この活動において大いに役立っています。現地の会場を一目で把握し、患者の待機動線や作業導線を瞬時に描き出すことで、最適な配置と流れを構築することができます。

具体的には、患者の待機スペースの確保、治療機材や薬品の安全かつ効率的な搬入経路の設計、

そして安心・安全な医療環境の維持に努めています。また、現地のロータリアンや行政関係者の来訪対応、さらには現地歯科医師との協働・交流の場づくりにも配慮し、全体を俯瞰しながら運営を支えています。

これは、ロータリーにおける SAA(会場監督)に通じるものであり、すなわち場の秩序と流れを整え、すべての活動が円滑に進行するよう支援する存在です。

さらに、現地のバランガイ(村・コミュニティ)長やロータリアンとの調整役も担っており、地域との信頼関係を築きながら、ミッション全体の成功に貢献しています。

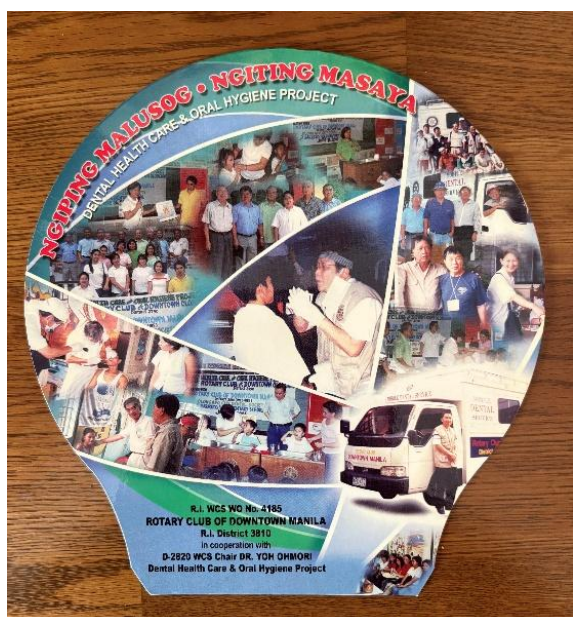
このような活動の参加者は、日本国内では九州から北海道まで多岐にわたり、すべて自費で集っています。志を同じくするロータリアンやボランティア同士の交流は、年々深まってきました。国内外を問わず、その出会いと経験はかけがえのないものであり、私自身も各地へ足を運び続けてまいりました。

これまでの「無料歯科医療奉仕活動」における奉仕活動の軌跡を振り返ると、2000 年 8 月の初参加以来、バギオ市、イロイロ市、ルバング島、マニラ市、オロンガポ市、ボホール島、スービック市、クラーク市、サンパブロ市、マカティ市、タクロバン市、パラワン島、そしてトンド地区など、数えきれないほどの地域を訪れてまいりました。

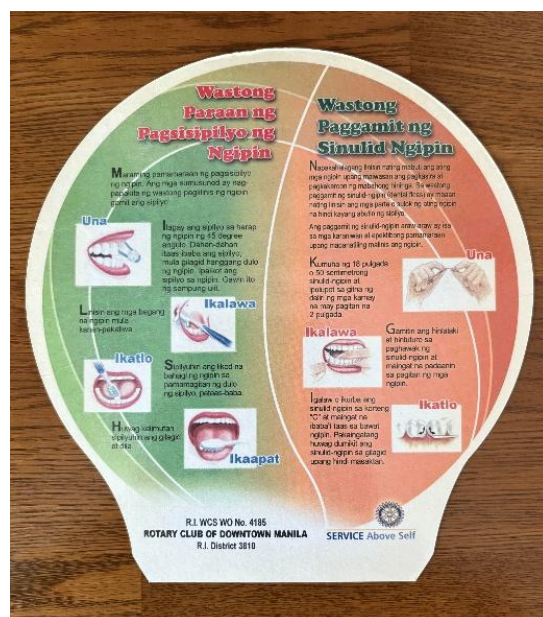
この活動を総括いたしますと、私個人の参加回数は 100 回を優に超えております。活動の参加者には歯科医師や歯科衛生士をはじめ、ボランティアの方々はロータリー財団のグローバル奨学生、ROTEX、さらには現在 WHO の口腔ケア部門で活躍されている方々も加わり、多様な人材が志を共にしてまいりました。

皆様にも、ぜひ海外へ踏み出し、現地のロータリアンと交流を深めていただきたいと思います。その一歩が、新たな視野と人生の広がりをもたらしてくれるはずです。

以下現地のロータリアンや子供たちに配布している PR バドルファン(表記はタガログ語です)



患者さんへの PR バドルファン 表



裏



デンタル・ミッションの現場



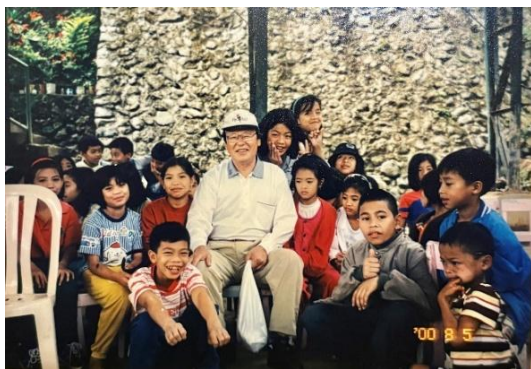
歯磨きをしないとこの様になる



現地の歯医者さん



ブラッシング指導



笑顔に囲まれて



電気がないので患者の口腔内をライティング



我が家の次女を伴って(有名なジープニイ)



バギオにて 初めての無料歯科医療奉仕



ミッション終了後の記念写真



口腔模型



待合スペース



初診風景 (BP 担当)



治療器具



治療風景 (コミュニティセンターで)

5. 無料歯科医療奉仕活動の終章と、新世代への継承

2019 年に始まったパンデミック『新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)』の影響により、しばらく海外での活動は停止を余儀なくされました。その間、フィリピン保健省からの通達により、「オープンエアでの医療行為の禁止」という新たな制約が設けられ、従来の活動形態は大きな転換を求められることとなりました。

さらに歯科医療の進歩や現地の医療環境の変化も踏まえ、40数年にわたり継続してきたこの活動は、2024 年 11 月、パナイ島イロイロ市でのミッションをもって一つの節目を迎えることとなりました。しかし、活動は終わっても「志」は決して終わるものではありません。これまで培ってきた想いや経験を次世代へと引き継ぎ、新たな形で未来へつなげていくことこそ、私の使命であると考えております。

◆ 世界とつながるということ ◆

ロータリーの最大の魅力は、世界中に広がる信頼のネットワークにあります。

フィリピン、ミャンマー、インドなど、さまざまな国での活動を通じて、文化や言葉の違いを越え、人と人が心でつながる瞬間を幾度となく体験してまいりました。たとえば、子どもたちにポリオワクチンを届けた日や、車いすを手にした少年が見せたあの笑顔——その一つひとつが、「世界は確かにつながっている」という実感となりました。

このような体験は、まさにロータリーだからこそ得られるものです。

どうか皆様も、扉を開け一歩外へ踏み出してみてください。

その先には、必ず新しい出会いと感動が待っています。

以下の写真は「無料歯科医療奉仕活動」を「ロータリーの友」に掲載したものです。

ロータリー アットワーク



ロータリー アットワーク

ROTARY AT WORK 写真集

WCS活動と国際交流 活動に参加して



東京中央RC 太田 嘉正
第2750地区 東京都

私は、建築士という職業にもかかわらず、ロータリー入会前の2000年から、第2820地区が25年前から継続し潮来ロータリークラブ(RC)の友人が計画・活動している、フィリピン歯科医療奉仕活動に年3回参加しています。現地クラブの活動に、日本のロータリー歯科医療奉仕団が協力する世界社会奉仕(WCS)活動で、貧富の差が激しいフィリピンのロータリーアンが行う社会奉仕活動には、多種多様な活動があり頭の下がる思いです。貧しい地域で、歯科医療を受けられない人々に抜歯を中心に活動を行っており、喜ばれております。

現在では口腔衛生事業に発展し、小学校を訪問しブラッシングや食育を指導する事業を展開。私はこれらの事業を東京中央RCに紹介し、参加者を募りWCSに参加するとともに、会員から歯ブラシやタオルなどを提供してもらい現地のクラブに持参、寄贈したりしています。

私たちのクラブもマッチング・グラントを利用したルバング島植樹、救急車の贈呈、レスキュー車などの整備事業に参加。7月にはマカティRC、ダウンタウンマニラRCの会長就任式に出席、6月の台風6号により多大な被害を受けたハナライ島メトロイロイロRCに対して義援金を贈呈しました。

国際奉仕活動は参加し継続して初めて友情が生まれ、世界平和の輪の広がりを認識できます。少しずつですが無理せず、続けたいと思います。

6.空飛ぶ車いすプロジェクト

目的は、『廃棄される車いすを再び命あるものとして蘇らせること』にあります。

(廃棄される車いすは三鷹ロータリークラブからの提供です)

この活動は、国際ロータリー第 2750 地区 京浜グループ・東京蒲田ロータリークラブの会員からのご提案により始まりました。

彼曰く、「当クラブが支援する大森学園高等学校にはインターアクトクラブ」があり、「空飛ぶ車いすプロジェクト」という意義ある活動が存在していたが現在は休眠状態となっているので、この活動を再び社会の光の下に蘇らせることはできないだろうか？」

この問いかけを受け、東京中央ロータリークラブ奉仕活動グループは、大森学園高等学校の足立教頭先生を訪問し、これまでの経緯を伺い、プロジェクト再生への強い決意を固めたのです。

車いす修理会の開始

2014 年秋、東京中央ロータリークラブの有志会員十数名が大森学園高等学校を訪問し、車いす修理会を開始しました。

この活動の特徴は、「IAC 高校生が指導者」であるという点にあります。生徒たちから、工具の基礎知識や安全な使い方や、準備品の整え方など、基本から丁寧に学びました。

約 3 時間にわたり、ロータリアン、ローターアクトクラブ (RAC)、インターアクトクラブ (IAC) が一体となり、協働で実践的な修理再生作業に取り組みました。

修理作業の内容

作業は分解から始まります。

各部品的位置を記憶し、丁寧にパーツを取り外し、タイヤの交換 (フラットタイヤへの変更) ブレーキの調整、ベアリングへのグリス注入し回転性能の改善、錆の除去と形状確認、座面・ハンドルグリップの清掃といった工程を経て、最終的には実際に乗車し、試運転を行い、異常がなければ作業は終了ですがここで一番大事なのはブレーキとそのストッパーのチェックです。

全ての修理工程を終えた車いすは、まるで「新品同様」の状態にまで再生されます。その後、搬送用にロープで縛り、梱包・ナンバリングを施して完成となります。

プロジェクトの意義

日本国内では、年間約 25 億円相当の車いすが廃棄されていると言われています。「この中のごく一部でも再活用できないか」という素朴な思いが、本プロジェクトの原点です。

一方で、世界には車いすを必要としながらも手に入れることができない方々が数多く存在します。私たちは、これをロータリーの国際的ネットワークを活かし、必要としている地域を見つけ、その方々に直接届けることができる——それこそがこの活動の大きな強みです。

海外への寄贈活動

東京中央ロータリークラブが最初に車いすを届けたのは、フィリピン共和国マニラ市内の老人ホームで、この支援は国際ロータリー第 3810 地区 ダウンタウンマニラロータリークラブの協力によって実現しました。

その後、活動はさらに広がりを見せています。

2014 年: 台風ヨランダ(2013 年 11 月 4 日発生)により甚大な被害を受けたレイテ島タクロバン市へ寄贈(ヤオカシン副市長より要請)

2015 年: 歯科医療奉仕グループと協働し、同市及び福祉施設へ 12 台を寄贈。さらに D2750 の PDG 舟木いさ子氏が主導、建設した現地の病院にも 4 台の車いすを寄贈。

2017 年: パラオ共和国国立病院へ 10 台寄贈(パラオ RC 協力)

以降: ベトナム、タイへと活動を拡大し、

2025 年: タイ王国へも搬送と毎年続いております。此处では当地区からタイ派遣の青少年交換学生(小さな親善大使)も寄贈のお手伝いに参加してくれました。有難いことです。

これらの活動は単なる物資支援とどまらず、現地ロータリークラブとの交流を通じた「心の架け橋」としても大きな意義を持っています。

本プロジェクトの修理活動及び搬送の流れは、以下の工程に沿って実施されます。

- ①廃棄予定車いすの調達
- ②大森学園学校への搬送又は都内の貸し会議室等
- ③ロータリー関係者による修理・完成後の保管
- ④空港への搬送
- ⑤ロータリアンが手荷物として空輸
- ⑥最後に、現地ロータリークラブの協力を得て施設に搬入する。

本プロジェクトは、現地ロータリークラブとの事前調整・交流及び必要とする方々への引き渡し及び使用説明など、これら多くの工程を伴うため、単独クラブではなく、複数クラブによる連携が不可欠です。

現在も当クラブが中心となり、東京三鷹ロータリークラブ、東京蒲田ロータリークラブ、中央大学 RAC、大森学園 IAC などが力を合わせ、継続的に活動を行っています。

この活動の締めくくりとして、「捨てられるはずだった車いすが、誰かの人生を支える存在へと生まれ変わる」というこのプロジェクトは、まさにロータリーの理念である「超我の奉仕」を体現する活動です。そして同時に世代や国境を超え、人と人、国と国をつなぐ“希望の架け橋”となる活動です。

今では、RID2750の代表的な奉仕活動の一つとして認知されております。



会車いす修理 『新品同様に手直しする』これがこの修理会の目的です。



無料歯科医療奉仕活動と空飛ぶ車いすの協働活動



Polio の罹患者の子に会う

7. ルバング島での植樹プロジェクトとデンタルミッション

次に、二つの活動を同時に行った例を示します。

これは、無料歯科医療奉仕活動と同時に行われたものです。

報道等でもご存じのように、終戦を知らずに島に潜伏、戦闘を続けた小野田寛朗元陸軍少尉が約30年間暮らしていたルバング島での奉仕活動です。

2003, 2004 年とフィリピン共和国の「ルバング島の山に檜(なら)の樹を植える活動」を行いました。現地の住民たちは山の樹木を伐採し、燃料として使っていたため、はげ山の状態となり、豪雨や台風の際には毎年、洪水となって街中にあふれてしまいます。それを防ぐために、山に樹を植えるしかないと言われ、ロータリアンや地元の方も含めて話し合い、実行に移されました。

具体的には、現地の農家の方の協力を得て、ハイブリッドの檜の樹の苗床を造り、育て、皆で山に植えに行くことにしました。しかし、それだけでは長続きしないので、「循環型のプログラム」を導入しました。具体的には、畑にはカシュウナッツの樹を植え、収穫した実を販売し、その収益でまた苗木を育てる計画です。

「美味しい魚を食べたければ山に樹を植えろ」という言い伝えがあります。この実践なのです。

これは、山に樹木を植えることで、雨水が直ぐに平地に流れ出ることを抑え、山の保水力を高めることを目的とした実践です。雨水は山の樹木によって土壌でろ過され、きれいな水となって川に流れ、更に海へと流れ出る仕組みです。



植樹風景セレモニー(スコップ持つ手が筆者)



ハイブリッド苗の苗床を前に

8. フィリピンのアルバイ地方レガスピにある『マヨン火山』

このプロジェクトのテーマも洪水の防止です。

何故、樹木ではなく、竹を選んだのか？その理由は以下の通りです。

竹はわずか半年で成木になり、根は地面の表面を覆うように横に広がります。これにより保水力が高まり洪水の防止に効果的です。

特に、毎年のように噴火を繰り返す活火山の山麓では、山の斜面に保水力が無くなると、雨による土壌の流出や洪水が発生しやすいため、マヨン火山麓に竹の植林をすることによって、災害のリスクの軽減が可能となります。

2024 年 9 月には、参加者 70 名で、竹の植林活動を行いました。参加クラブは日本を含めて 13 クラブに及び、地区を越えた国際的な活動となりました。

私たちは、RI3810 地区の IPDG ジョイス氏や友人ロータリアンと共に、洪水の被害が懸念される山麓の村落を訪れました。マニラや地元レガスピのロータリアンと協力し、トラスト・レール・フوند (TRF) のグローバルグラントを活用し、洪水を未然に防ぐ活動を行いました。日本から参加したクラブは、D2750 の東京中央ロータリークラブ、東京グローバルロータリークラブ、それに D2790 地区の市原中央ロータリークラブでした。

竹の種類は、日本では約 500 種類ほどですが、世界では 1000 種類を超えています。以前、東南アジアを訪れた際、建設現場で竹の足場を見かけました。

『あんな竹の足場で工事をしていて大丈夫なの？』という疑問に思ったこともありますが、「竹の種類が全く違いますので大丈夫です」と答えておりました。理由は、東南アジアの竹は日本のものに比べて肉厚が倍以上ありますので、非常に丈夫で長持ちするから足場に利用しても大丈夫なんです。私たちも、そんな竹を植える活動を行ってきました。



2026 年 1 月、5 月にも（アルバイ州、標高 2462M）が噴火しました。



マヨン山をバックに竹を植える
この火山が噴火しました



バナーを前に参加者と



マヨン山をバックに



バイクで川下り、こんな遊びもできます



竹の植林



現地の竹の肉厚は日本のそれとは違います

9. 車いすテニス・ジュニア選手権

2020 年開催予定であった『東京オリンピック・パラリンピック』は、新型コロナウイルス感染症の影響で一年先送りとなり 2021 年に無観客で開催されました。

そのオリンピック・パラリンピック開催を盛り上げるために、2750地区のロータリアン達は、大槻哲也 PDG 始め、地区を挙げて沢山の種目の支援をしていました。

私たち東京中央ロータリークラブも、日本財団と一緒に『車いすテニス』を応援していました。

一般社団法人『道夢』の丸山弘道コーチ主催の『車いすテニス Jr 選手権』を応援し、慶應義塾大学の虻谷テニスコートを借用し、第 4 回大会まで支援していました。しかし、残念ながら、2019 年以降、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症の感染拡大により、このプログラムもやむなく立ち消えとなってしまいました。



国枝慎吾氏を囲んで



丸山弘道コーチと国枝慎吾選手

第 4 回車いすジュニア選手権大会



猿渡昌盛 PDG もご参加応援です

10. 東京オリンピック・パラリンピック競技大会

2021 年の夏、ボランティア登録を済ませ、観客の誘導等の活動をさせて頂きました(無観客と言う事でしたが学校関係の生徒も沢山来場しておりました)。そこで私が感じたのは選手たちだけでなく、ボランティアの方々の友情や心の優しさが観客に伝わっているということです。

当時、東京都知事だった石原慎太郎氏が『オリンピックを開催する都市で、マラソンをしていないのは東京だけだ』と提言し、東京マラソンが始まりました。現在では数万人のランナーが集結し東京の街を駆け抜ける国内最大級のイベントとして定着しています。その東京マラソンでは、発足当時、築地エリア給水ボランティアの奉仕活動をしました。2021年のオリパラ時にも観客誘導ボランティア活動に参加しました。



東京マラソンボランティア



東京オリパラ



ピンバッジ

11. ミャンマー・パダウツミヤイン僧院 教育小学校災害復旧工事

報道によると、2008 年 5 月 2 日から3日にかけて、ベンガル湾で発生した、ミャンマー(ビルマ)のサイクロン・ナルギスの被害から一年が経過しました。この災害により、138,366 人の死亡者が出ました。このデルタ地帯では、海岸の防波堤が決壊し塩分を含む水が稲作地帯に流れ込み、農業に大きな影響を与えました。当時の国連のパンギムン事務総長も現地を訪れ被災地の視察を行いました。ミャンマー連邦国はアセアンにも加盟していますが、軍事政権下にあるためインフラの復旧には支援しないということになっているようです。

このサイクロンにより、140 万人の方が被災し、50 万人を超えるホームレスの方々が発生しており、「復旧の道は、まだまだ復旧の道は遠いところにあります」、という情報を得て、私たち東京中央ロータリークラブと船橋東ロータリークラブは、「被災された方々が、一日でも早く以前のような生活に戻れるように支援をしたい」と考え、これからのミャンマー連邦国を背負っていく子供たちが安心して学べる環境を整えるためように校舎を再建し、RI の提唱している6つの重点分野の一つである、『識字率の向上と教育支援』に寄与したいと考え、このプロジェクトを立ち上げました。

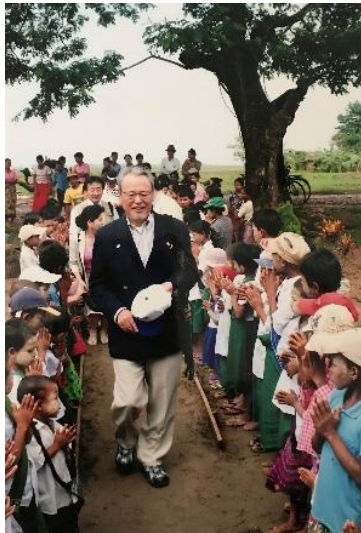
プロジェクトについては、第 2790 地区、船橋東ロータリークラブには何回もメイクアップしており、このような活動についての語り合える関係のになったクラブであります。学校の再建は本来ならば、二校のみだけではなく次の建築計画も予定しておりましたが、残念ながらことに、東日本大震災の発生により、日本全体の状況を優先せざるを得ず、三校目の建設計画は延期となってしまいました。写真の通り、最初は飲料水の確保を目的として井戸掘りから始め、設計・工事へと進み、竣工式には二つのクラブの奉仕委員会メンバーが多数参加しました。



最初は井戸掘りから



竣工式の集合写真



公道から新校舎までのアプローチを歩く

12, インド・デリーでの POLIO 根絶ワクチン投与に参加



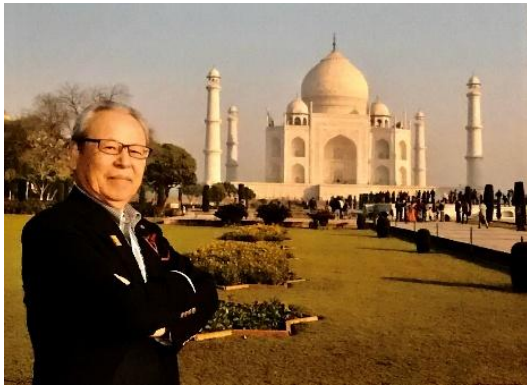
バナー交換



皆さんで前日のラリー

2018年1月に『瀬戸隆海』氏(RI2820地区現ガバナー)氏のお誘いを受けて、インド・デリーで行われた Polio ワクチン投与活動に参加しました。当初は観光気分で臨んでいましたが、現地に到着すると、歓迎の人でいっぱい、それどころではありません。ヨーロッパやアジア等などさまざまな地域から沢山のロータリアンが参加していました。そして交流も深まり出来、楽しく投与活動をする事が出来ました。

これもまた、始まりは小さなメイクアップでした。そして多く沢山の友人ができ出来、ロータリーについて語り合いながら、学びが深まっていきました。すべては、『繋がり』から生まれたのでした。



タージマハールの見学



5 歳以下の子供たちにワクチンを投与



20 人分のワクチン、2 滴を投与とマーカーペン お揃いのキャップ

私の『Polio 根絶はここから始まりました』

2015 年にフィリピンのレイテ島タクロバン市で『無料歯科医療奉仕』のボランティアに参加し、今回もこれは単なる奉仕活動にとどまらず、「空飛ぶ車いす」の活動も一緒にやってみたいという発想から、此处では、歯科医療奉仕と空飛ぶ車いすプロジェクトを同時に行いました。私たちは、車いす12台をレイテ島タクロバン市に持参しました。副市長の・ヤオカシン氏から、『この子には是非とも車いすを挙げてください』と言われ、車いすを持参したところ、そこには小さな男の子がおり、家から一度も外に出たことがない子でした。

私は、その子に触れてみて、彼が『Polio の罹患者』であることが判りました。この子の父親は、寄贈された車いすにその子を乗せて、『初めて この青い空を 見せることが出来ました』と言っていました。



Polio の罹患者さんに車いすのを！！

13. ロータリーの7つの重点分野 基本的教育と識字率向上

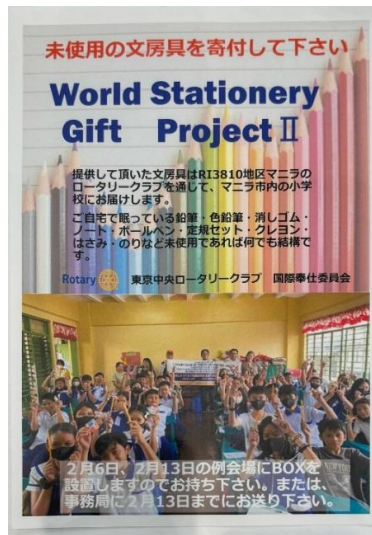
このプロジェクトは、3年前から始まりました。RI3810 地区の RC of Downtown Manila から「文房具が不足している現状があり、是非支援をお願いしたい」との要請を受けたことがきっかけです。今回で3回目の活動となります(2026/3/16～19)

場所 フィリピン・マニラのケソン市

学校 Padre Mariano GOMEZ Elementary School(公立)

生徒数 約8000人(幼稚園～小学6年生)

出発前、東京武蔵国分寺ロータリークラブの直前会長・鎗木孝和氏と空港で合流し、最終確認を行い、活動内容を改めて整理して気持ちを整えて現地に向かいました。



会員に寄贈を呼びかける



同日の13時40分にマニラ・ニノイ・アキノ国際空港(NAIA・ターミナル3)に到着。東京でクラブ会員や他クラブの会員の皆様から提供いただいた文房具(ボールペン、鉛筆、メモ帳等、計35kg)の手荷物を受け取り、出口へと向かうと現地クラブの会長 Majid 氏とセクレタリー Nica さんが温かく迎えてくださいました。



会長と事務局の出迎え、中東の戦争でガソリンが高騰して道路はガラガラです。久しぶりの再会にもかかわらず、去年の会長就任式でのご縁もあり、すぐに打ち解けることが出来ました。今回特に印象的だったのは、ホテルに向かう一般道や高速道路は中東の戦争の影響でガソリンが高騰しており、その影響で道路はガラガラです。通常 90 分かかる空港からホテルまでの移動が約 30 分で到着したことです。因みにガソリン価格は(約90ペソ/L=270円)でした。

宿泊先はケソン市の「LUXENT HOTEL」で、現地ロータリアン 8 名による歓迎夕食会が開かれ、明日の活動や過去の取組みについて意見交換を行い語り合い、交流を深めました。

翌日、午前中はチャイナタウンの市内観光をし、現地の多様な職業や社会の仕組みに触れる貴重な機会となりました。

特に印象的だったのは、ペットショップの発展型施設として、ホテル・病院・スポーツジムまで併設した施設で、日本よりもかなり進んでいました。最も興味深かったのは、ボランティアで構成された消防組織で、これらの現地の先進的な取組みに感銘を受けました。

午後 2 時、いよいよ本プロジェクトの実施です。

訪問先の[Padre Mariano Gomez Elementary School]は、在校生徒 8000 名が在籍する大規模校であり、午前・午後の二部制で授業が行われています。

今回は代表として約 300 名の生徒が集まり、校長先生はじめ、学年担当職員も交じり文房具の配布を行いました。

配布前の整然とした準備風景や、そして配布後に子供たちが満面の笑顔を見せている様子は、何よりも心に残るものでした。子供たちの『学びたい』という純粋な気持ちに応えることが出来た瞬間であり、この活動の意義を改めて実感いたしました。



生徒に配布しているセット/1名



生徒たちに配布前の準備 (RC of Downtown Manila のメンバーと教職員たち)



文房具 配布後の笑顔の子供たち



フェアウェルと会長エレクト・アイリーン氏(青少年交換で RI 中谷理事宅にホームステイ) 帰国前日はフリータイムとなり、四半世紀前からの友人である RCDM(ダウンタウンマニラロータリークラブ)の PP Willie Yu(建築家)、そしてルバング島 RC の PP Willie Masangkay 氏と再会いたしました。私にとっては「B.F.F」です。

2003, 4年に、ルバング島にて 45,000 本の植樹を行った当時の思い出を語り合いながら、『The Orchard Golf & Country Club』にて旧交を温める貴重なひとときとなりました。



3人でゴルフです。場所は『Orchard Golf & Country Club』

今後のご案内(RC ダウンタウンマニラと RC メトロイロイロ)

2026年7月23日(木曜日) 夕刻から、RC of Down Town Manila 会長就任式にご招待頂いております。

2026年6月27日(土曜日)夕刻から、RC of Metro Iloilo 会長就任式にもご招待を頂いております。ご関心のある方は、ぜひ一緒にご参加頂ければ幸いです。

ご関心のある方は、ぜひ一緒頂ければ幸いです。

今回の結びに

活動を通じて改めて感じたことは、「小さな支援が、大きな未来を造る」ということです。文房具ひとつが、子供たちの学びを支え、やがてその学びが地域や社会を変えていく力になるロータリーの理念である『超我の奉仕』は、まさにこの積み重ねの中にあると実感いたしました。

今後も継続支援を通じて、未来を担う子供たちの可能性を広げていきたいと考えております。

14. 2011 年4月 東日本大震災・石巻泥さらいボランティアを企画・参加

泥さらいボランティア活動について

2011 年 4 月、東日本大震災の発生を受け、私は石巻市、亘理町、女川町において泥さらいボランティア活動を企画・参加しました。活動期間は、4 月 25 日～28 日、5 月 29 日・30 日、8 月 4 日・5 日、8 月 25 日～27 日、そして 11 月 11 日～13 日までです。主な活動場所は、宮城県石巻市内の八幡町や大門町をはじめ、亘理町や、女川町など、海に近い地域でした。

これらの地域は、多くの方がテレビ報道で目にされた場所でもあります。しかし、映像だけでは決して伝わらない現実がそこにはありました。映像には臭いもなく、音もなく、そこに生きる方々の切実な声も伝わりません。ましてや、被災された方々がカメラやマイクを向けられたとき、「本当に胸の内にある思いをそのまま語ることは難しいのだ」と、現地で実感いたしました。

そんな中で、力仕事の合間に、被災された 76 歳の女性が静かに語ってくださった言葉が今も忘れられません。彼女はこう言いました。「津波を皆さんは“波”と言うけれど、あれは波ではありません。大きな水の壁です。」

ご自宅の二階から外を見ていると、その“水の壁”が押し寄せ、家々や積まれていた丸太を次々とさらっていく様子を、ただ見つめるしかなかったそうです。そのあまりにも非現実的な光景の中で、次第に肝が据わり、かえって冷静に見えてしまったと、話してくださいました。

津波が引いた後、多くの方々に助けられながら避難所で数日を過ごし、ようやく自宅へ戻ったときには、家の中は誰かに大きく荒らされていたそうです。箆笥の引き出しや金庫なども開けられ、貴重品の多くが失われていたとのことでした。さらに、混乱の極みにあった被災地では、信じがたい行為も起きていたと聞きました。私はその話を通して、災害の恐ろしさは自然の猛威だけにとどまらず、人の心の荒廃をも映し出してしまうことを痛感いたしました。

世界からは、日本人は災害時にも秩序を守り、冷静に行動する国民として高く評価されてきました。実際にそのような姿も数多くありました。しかしその一方で、極限状況の中で起きる現実には、報道だけでは見えてこない厳しさがあることも知りました。

被災地では、まさに“悲鳴”が聞こえてくるような状況でした。ヘドロが家の隅々にまで入り込み、冷蔵庫の中にまで及んでいました。長期間にわたる停電の中で、家財道具や生活用品は散乱し、ひっくり返せば強い臭気が立ちのぼる——そのような過酷な環境の中で、私たちは建物内の泥さらいに取り組みました。

また、亘理町では、津波の被害を受けたイチゴ畑の再生支援にも携わりました。泥を取り除き、少しでも元の営みを取り戻すためのお手伝いをする中で、被災地の復興とは、単に町を元に戻すことではなく、人々の暮らしと希望を少しずつ取り戻していく営みなのだと強く感じました。

このボランティア活動を通して、私は災害の現実の厳しさと、人と人とが支え合うことの大切さを、身をもって学ばせていただきました。そして、被災された方々の言葉や姿は、今も私の心の中に深く刻まれています。



止まったままの時計



支援物資の仕分け作業



濡れた畳は重かった

私たち、東京中央ロータリークラブの会員は

この様に、2011年3月11日の「東日本大震災」時に、石巻の被災地で活動するボランティアを募り、一般の方々・帝国ホテルの職員・ロータリアン・ローターアクターと共に深夜に高速道路を走り、石巻市の専修大学キャンパスのボランティアセンターに活動の登録し、その地震・津波で甚大な被害にあった方々の住宅や道路を人や車が通れるようにお手伝いをしたことです。

活動を終えたときお住まいの方から「本当にありがとう」涙ながらにと言われたことは忘れておりません。

一人ではできないが、みんなの力で、力を合わせて活動したことです。

参考；2011年に「ロータリーの友」に投稿したものを以下に掲載します。

ロータリー、多岐にわたる活動

石巻で瓦礫の撤去作業

東京中央RC 太田 嘉正

3月11日に発生した東日本大震災の被災者を支援するため、東京中央ロータリークラブは、第2750地区に200万円の寄付を、そして3月23日に、日本赤十字に直接3,000万円の寄付いたしました。しかし、その後の経緯は、読者の皆さまもご存じの通り、特に被害が大きい地域では復興のきざしさ見え、多くの方々が日々苦しんでいらっしゃいます。私たちの復興への願いがなかなか届かないいらだち、焦り——。われわれクラブ会員が主体となって、少しでも何かできないか——。会員のそんな思いが結実し、2011年4月11日、「東京中央ロータリークラブ東日本大震災ボランティア事務局」は立ち上がりしました。

私たちの活動の旗印は、装備や支援物資を自ら運び、現地で汗を流して私たちの力を直接注ぐことができ、これらをすべて自己完結型で行なえるボランティア活動であることです。この考えに基づき考え出した結論が今回の「ボランティアバス」企画です。まず、各所からの連絡を統合するため事務局を立ち上げて参加者と資金支援者をつのりました。出発予定が4月末で、非常に限られた短い時間的制約があったにもかかわらず、クラブ内外から多くの参加希望者と資金援助も寄付をいただくことに成功しました。参加者はクラブ会員の他、例会を行っている帝国ホテルの方々、そして中央大学ロータークラブを中心としたロータクターなど、総勢50人



が終結し、第1回は4月26、27日に、第2回は5月31日（台風の影響で1日に短縮）に、石巻市で最も被害の大きな場所で泥さらい活動を行いました。

現地作業は、1組10～15人で行います。比較的小さな家であれば、このグループで1軒を終えることができます。現地到着前にチームを分け、それぞれチームリーダーを到着前に選出して現地での作業に備えました。参加メンバーの多くは現地の状態について報道で、ある程度の知識はありましたが、ほとんどの参加者は、現地の活動にこれほどの困難が伴うとは、おそらく予想していなかったのではないのでしょうか。

家の中は、ヘドロで覆い尽くされています。まともに歩くこともままになりません。ただ歩いているだけでも転びそうになる中、家の中から冷蔵庫や大型家具などを人の手によって運び出さなければなりません。ヘドロには釘やガラスの破片が、そこらじゅうに埋まっています。実際に転倒してガラスの破片で負傷した人もいました。まさに危険と隣り合わせの作業です。そして映像では伝えることができない強烈な臭い。テレビ、ラジオでもこの臭いについては言及されていますが、視覚的、聴覚的情報と違ってこの強烈な臭いの情報を正確に伝えることはできません。海水、海産物、油、腐敗臭……。これらにヘドロが加わって、さらに悪臭に拍車をかけています。

第2回では2か月以上経過していたため、さらに家の中の冷蔵庫や貯蔵庫にあった食品の強烈な腐敗臭も加わり、人生で体験したことのない強烈な臭いです。しばし作業の手を止め、少し離れたところで軽く深呼吸し、そして持ち場に帰って急いで作業する。大型冷蔵庫は中身をすべて取り出そうにも、この悪臭に全員が耐え切れず、ある程度出して少し軽くなった時点で運び出しました。重さよりも臭いのほうが耐えられなかったわけです。

タンス箆箆や食器棚などの大型の家具からは、できるだけ中に入っているものを取り出します。それにより運び出すものがさらに増えていく感覚です。家具類は壊れていることがほとんどで、釘が出ていることも少なくありません。それらに気をつけながら重量家具を運ぼうとすると、家具はヘドロで滑りやすくなっていてしっかりと抱えることができず、指先にさらに大きな重量がかかります。家具を運び出すと今度は畳です。畳をはがし、



少しでも持ちやすくするためヘド口を落とします。そして運ぼうとすると——、この畳が水分を吸って想像以上に重いのです。作業は困難を極めました。

作業中は1時間に10分程度の休息を取るルールでしたが、膨大な作業量に実際には休息を取る時間は、昼食時以外はありません。絶え間なく作業して、やっと4～5時間ではぼ1チーム1軒を終えることができる作業量でした。

作業後、活動を終えた家以外の場所に目を向けると、そこは町というよりまるでガレキ置き場です。道は冠水し、歩行者はもちろん車での通行も危険と隣り合わせです。「このような状態がいつまで続のだろうか……」。作業を終えて泥や家具が運び出されて、手をつける前からは想像もできないほど片付いた家の中を見ながらも、すべてを解決するには程遠い周りの状況に、頭の中ではこの言葉がこだましていました。

作業を終えた参加者との会話でわかったことですが、全員がある種の空虚感を感じたようです。あまりの被害の範囲の大きさとその壊滅的な状況を見ると、その思いはさらに強くなります。これは、到底1クラブで解決できる範囲ではありません。さらに泥さらいやガレキやごみの撤去が遅れている状態で、衛生面の不安も出てきつつあります。現に、第2回では、大型のハエが舞い、ゴミには大量のハエが集まっています。手で追っ払わないと私たちの顔にもまとわりついてくる状況です。ヘド口の中の化学物質や細菌も心配です。今後疫病がまん延

しないか、ということはどうしても考えてしまいます。今は、「復興」という2文字も通か先に思えるほど、深刻な状態です。ひとつ言えるのは、現地の方々は今現在も、このような悲惨な状態の中で生活しているということです。

そしてもうひとつ心配なのが、現地のロータリークラブです。すべてのロータリアンは友人です。そして特に日本のロータリアンは、「家族」だと思います。現地に奉仕の根を張っていらっしゃるロータリークラブのお手伝いすることは、現地の急速な復興の大きな手助けになると信じています。現在、一部のロータリークラブ、特に東北地方の一部でロータリーのネットワークが分断され、活動もままならない状況であると聞いています。同じロータリアンとして、手を取り合って協力できる方法はないでしょうか。

私たち東京中央ロータリークラブでは、この震災ボランティア事務局を、東京中央ロータリークラブの事務局の機能の中に組み込み、クラブの活動として継続して、現地のロータリークラブとの連携を強化して、ロータリアンの皆さんと現地との掛け橋になるように計画しています。われわれの今後の活動目標は、現地の緊急的な支援だけでなく、ロータリーの奉仕活動にふさわしい復旧、復興活動を行うことです。日本に広がるロータリーのネットワークを、日本のロータリアンの皆さまと力を合わせて復興したいと思っています。皆さまのご協力をお願い申し上げます。

(第2750地区 東京都)

15, 終わりに・奉仕活動ってなんだろう

「ボランティア」という言葉を辞書で引くと、
「志願者」「篤志家」「自発的無償行為者」「進んで引き受ける」「買って出る」
といった意味が並びます。しかし、私が考える奉仕の本質はもう少しシンプルです。

皆さまもご存じの『ハチドリのひとつく』（監修 辻 信一）という物語があります。
南アメリカの先住民に伝わるお話です。以下 引用です。

『森が燃えていました、生きものたちはわれ先にと逃げ出していきました
でも、クリキンディという名のハチドリだけは、くちばしで水を一滴ずつ運んでは
火に落としていきます 動物たちがそれを見て笑いながら言います
『そんなことをして、何になるんだ』といって笑います
クリキンディはこう答えます。
『私は、私にできることをしているだけ』

——この一言に、奉仕のすべてが凝縮されているのではないのでしょうか。

私は、ボランティアとは『今、自分にできることを、自分の力で行うこと』だと考えています。
東京中央ロータリークラブでも、私は会員の皆さまにはこうお伝えしています。

『知恵を出してください。汗を出してください。お金を出してください』

どれか一つでもいい。自分にできる形で関わること、それが奉仕です。

困っている人を見たとき、心のどこかが動く。
それは誰もが持っている自然な感情です。
ならば、その“動いた心”に正直に行動すればよいのです。

ロータリーは単なる慈善団体ではありません。
自ら汗をかき、知恵を絞り、必要であれば資金も工面しながら、主体的に社会に関わる団体
です。
その中で私たちは、自分自身を磨き、世界とつながり、人生を豊かにしていきます。
だからこそ私は伝えたいのです。

****「扉を開けて、外に出よう」****と。

その一歩が、誰かの人生を変えます。同時に、自分自身の人生も大きく変えていくのです。
私の原点は、フィリピンでの無料歯科医療奉仕にあります。
何も分からないまま参加したその活動。
雨の中、長い列をつくって待つ子どもたち。
一人ひとりが治療を待っていました。
初めて目にする光景でした。

やがて治療を終えた子どもが、笑顔で帰っていく。

そんな 『一人の子どもの笑顔』でした。

その瞬間、私は深く心を打たれました。

『人の役に立つとは、こういうことなのか』

その感動が、私の人生の方向を決定づけました。

それ以来、私は常に思っています。

「私たちを待っている子どもたちがいる」と。

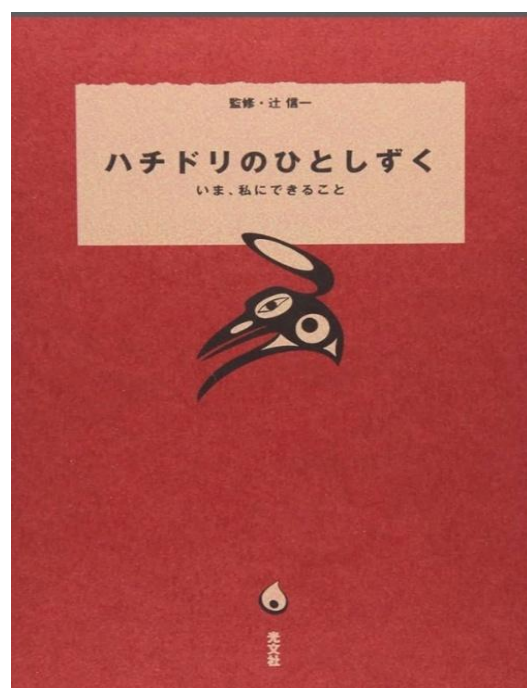
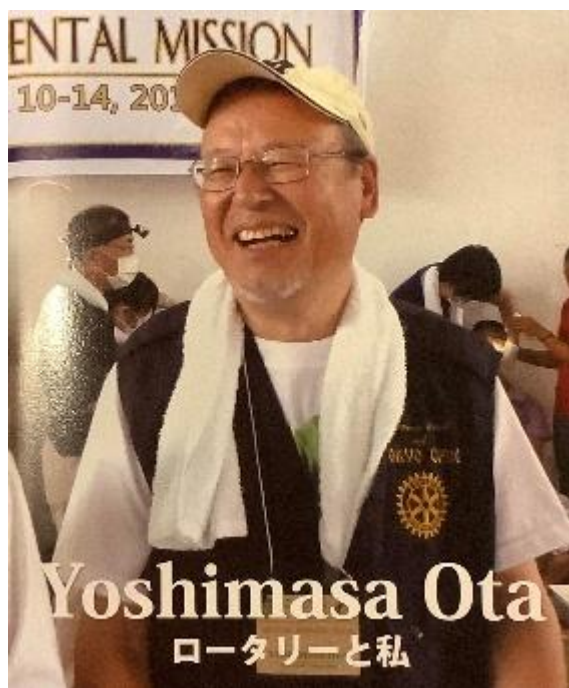
Rotary の活動を知ってもらいたくて、家族も全員参加してもらいました。

奉仕は一人だけのものではなく、心と心をつなぐものだからです。

奉仕の成果は、すぐには見えません、時間をかけて続けることで、確かな価値が生まれます。

そして何より、

自分も、周りの人も『楽しい』と感じられる奉仕こそが、長く続く力になります。



その先には、必ず——かけがえのない笑顔が待っています。

最後に、私の信念を一言で申し上げます。

奉仕は 出来るときに出来る力で！！

ありがとうございました。